

大名の城から公爵の邸宅へ

19世紀の後半まで、毛利氏は日本海に面した萩城を居城とし現在山口県となっている領域全土を支配した、武家の氏族でした。明治維新に伴って日本の政府がより近代化、中央集権化されると、反乱を防ぐため武家の城の大半は破壊されました。毛利氏の萩城も例外ではなく、1874年に破壊されてしまいました。

旧大名家は東京に集められ、毛利家も高輪邸に住んでいましたが、藩主を務めた地には住まいを持っていませんでした。毛利元徳公爵は1892年に山口に新しい本邸を建設することを決めましたが、戦争が続いたため建設は遅延しました。1912年にやっと建築工事が始まり、毛利邸は1916年に完成を迎えることとなります。

毛利邸の設計は、日本の建築家である原竹三郎が担当しました。巨大で複雑な建築でありながら、良質な材料と最新の技術を効率よくまとめあげたところが、近代和風建築の粋とされています。全部で60部屋のうち、洋間は2部屋だけでした。

2つの家紋

毛利邸では、邸宅のあちこちで2つの家紋を見かけます。車寄せに入って見上げると、「一文字三つ星」（3つの円の上に1本の水平線）と「長門沢瀉」（沢瀉、オモダカ）の両方の家紋が見えます。この2つの家紋は、照明器具から引き戸の取っ手に至るまで、邸宅の至る所で繰り返されます。

貴重な材木や古代の木々

車寄せの天井板に木目が美しいケヤキの木が使われているように、珍しく貴重な木材が邸内全体でふんだんに使われており、毛利家の富と地位を伝えています。例えば邸宅の最初の廊下の床は、それぞれ長さ8メートル、幅1.5メートルの大きさの台湾産ケヤキの平板2枚でできています。柱や直交

梁には、同じ木曾ヒノキが使われています。このほか広間の引き戸には、屋久島の神代杉である屋久杉が使われています。

天皇をお迎えするのにもふさわしい客間棟

邸内最大の部屋は客間棟で、ここはまた邸内で唯一 2 階建てになった部分でもあります。この棟は三間続きの大広間から成り、天井には入り組んだ格天井が施されています。広間からその後ろにある客間に通じる隠れ通路により、天皇やその他の大事な客はプライベートな空間から公共の空間へと誰にも会わずに移動することができます。毛利邸は 1916 年から 1966 年までの 50 年間住宅として使われていましたが、その間、大正天皇が一度、昭和天皇が二度と、全部で三度の天皇のご訪問がありました。

見晴らしのいい部屋

客間棟の 2 階に行くには巨大な階段を通りますが、その階段は 3 つの踊り場と段がそれぞれヒノキの大角材 1 本からできています。規模がやや控えめで設計もよりカジュアルな上階からは、庭の絶景が見下ろせ、客にとってくつろぎの部屋となっています。

毛利邸でのさらなる見どころをご覧ください。